

わかちあいを通して身につける情動と認知 その2

－「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」による発達支援－

企画・話題提供者：	佐々木丈夫	（日本公文教育研究会）
司会・話題提供者：	田島 信元	（白百合女子大学）
話題提供者：	宮下 孝広	（白百合女子大学）
	中島 文	（白百合女子大学）
指定討論者：	泰羅 雅登	（東京医科歯科大学）
	秋田喜代美	（東京大学）

【企画主旨】

「乳幼児期における家庭での母親による歌いかけ活動」、「乳幼児期における家庭や各種施設での読み聞かせ活動」、「児童期における家庭や学校での歌唱・読書指導活動」という3つの活動は、これまで連続したものというより、それぞれの発達期における個別の発達課題に対応する個別活動として認識・実践され、また理論面からの検討もなされてきたといえよう。私たちも前回のシンポジウムでは「歌いかけの発達心理学」として、「歌いかけ活動」に焦点化してその構造と機能についての討議を行った。しかし、継続して討議・調査を続ける中で、「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」の活動は、それぞれ特有の機能を持ちながらも、実際には相互に非常に密接な相互関係を持って子どもたちの発達に寄与していると考えられるようになった。今回のシンポジウムでは、一見独立して見えるこれら3つの活動を、「わかちあい」という言葉をキーコンセプトとしながら、その構造と機能を様々な見地から検討することによって、「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」が、一体として結びついていく道筋について考えていく。この試みによって、これまで分断されて検討され、また異なる実践者によって実践されてきたこの3つの活動の奥にある、子どもの認知・情動発達に与える共通の基盤について討議していきたい。なお、指定討論では、脳科学の観点から泰羅雅登先生（東京医科歯科大学）に、保育学・教育学の観点から秋田喜代美先生（東京大学）にコメントをいただき討議を深めていきたい。

発達支援としての「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」活動の位置づけと理論的アプローチ 田島信元（白百合女子大学）

「歌いかけ」「読み聞かせ」活動は、それぞれ独自の側面をもちながらも、発達の相互に深く関連しあって、子どもの発達全体に影響を及ぼす発達支援の柱となることが、理論的にも実証的にも明らかにされてきている。「歌いかけ」「読み聞かせ」活動は、それらを体験する子どもにとって、それぞれ「歌い合い」「読み合い」といった親子間などでとり結ばれる“社会的相互行為”という側面から、そうした行為が子どもの内部に心内化され、子どもが子ども自身に歌いかけたり、読み聞かせたりする“個人内相互行為”という側面をもつようになって、「歌唱」「読書」活動に結実する。これはヴィゴツキー（2001）の文化的発達理論（文化的発達の一般的発生原理）により示唆され、モデル化され（コール、2002）、かつ実証もされてきたところである（田島ら、2010）。その意味では、子どもの「歌唱」「読書」活動は、他の社会・情動・認知活動と同様、発達の相互に決して個人内活動に留まらず、社会に対して発信し、他者との間での「歌い合い」「読み合い」へとつながっていく「個人と社会との間の往還活動」過程の一断面（切片）であり、螺旋的発達の一環として位置づくものといえる。また、「歌いかけ」「読み聞かせ」活動は、上記のような活動そのものの獲得だけでなく、それぞれ大人－子ども間における「情動の共有」、「認知の共有」過程を経て、個人内における「情動の自己調整機能」「言語媒介的認知・思考機能」の獲得を果たし、さらに社会的活動への展開に至るといえる、さらなる発達を遂げるための装置の獲得、いわば子ども自身の発達の基盤づくりという成果を獲得することが示唆されている（田島ら、2010）。以上のような発達の基盤的な成果を獲得する「歌いかけ」「読み聞かせ」活動は、まさに子どもの発達支援の中核的な活動といえるわけで、子どもにとって適切な「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」のあり方を吟味することは発達支援のあり方を探る意味で必須の作業であると考えられる。その際、①発達段階を知り、それに応じた関わり、②子どもの状況を知り、それに応じた関わり、③そのため、そうした活動に続く展開活動を支援することの重要性、という観点からの吟味が必須であろう。

発達支援としての拡張的「読み聞かせ」活動のあり方 宮下 孝広（白百合女子大学）

児童期以降の発達支援を考える上で、読み聞かせ活動の意義はもっと評価されてしかるべきであろう。昨今、小学校はもとより中学校や高校においても読み聞かせは教育実践として広がりを見せている。従来、文字を読むことができるようになる児童期以降は一人で本を読むこと、しかも黙読することが読書活動の中心をなしてきた。しかし、発達が社会的相互作用のなかで進むと考える立場に立てば、読みを獲得して間もない児童期には、他者に対して読み聞かせること、そのために文章を理解し自らの表現とするために読みを鍛えていくことが身近に実践できる環境が必要である。白百合女子大学生涯発達研究教育センターおよび日本公文教育研究会が塩尻市市民交流センターと共同して進めている「読み聞かせ交流会」はまさにそのような意義を持つ活動として展開している。

その基本的な視点としては、第一に、発達を垂直的なものとしてだけではなく水平的なものとして捉えることである。小学生にとって、幼児期までに家庭において個人的な活動としてなされてきた読み聞かせが、今度は自らが幼児およびその親に向けて行う社会的な活動へと拡張されることによって、読みの発達が促されていく。そして第二に、拡張された活動への小学生の参加を促すために、老年期にある高齢者と交わらせることである。高齢者のジェネラティビティは読み聞かせ活動を媒介として小学生にも、また幼児やその保護者に向けても発揮され、この活動を支えていく。第三に、交流会の参加者である小学生、高齢者、そして幼児や保護者だけでなく、この活動を組織し運営する行政の関係者も含めて、それぞれの活動領域を越境させることで、関係者すべての発達を促す新たな場を作り出していることである。シンポジウムでは、このような事柄をめぐって、読み聞かせ交流会の実践を紹介しながら論じていきたい。

発達支援としての乳幼児期の「歌いかけ」活動のあり方 中島 文（白百合女子大学）

歌いかけは親からの乳幼児に対するコミュニケーションであり、あらゆる国で見られる母子相互行為である。本報告では歌いかけ活動の基礎理論として、Communicative Musicality 理論 (Malloch & Trevarthen, 2009) をあげる。この理論から、歌いかけは子どもの状態を調整し情動を伝える役割をもつ情動的コミュニケーション成立への貢献が考えられ、この情動的コミュニケーションは認知的及び社会的な発達の基盤となるといわれている。歌いかけには母子の情動的な関わり合いを促進する特徴が多く含まれており、歌を介したやりとりにより母子は情動を共有すると考えられる。Wertch(1998)は、発達とは文化的道具に媒介された行為の文化的学習過程であるとしたが、歌いかけにおける子どもの発達も、まさに母親との共同行為を通じた歌の獲得と歌いかけの媒介に基づいた社会的相互行為過程であるといえる。母親との十分な共有体験は、一方的な歌いかけではなく、互いに調整をしながら柔軟に歌いかけを変化させることで生まれると考えられる。このような歌いかけにより、子どもは心地よさとともに歌を自己内に取り込み、言語や認知発達に伴い自発的な表現活動が始まる。母親と共に歌いながら情動調整をすることを経て、一人で歌うことによる自律的な情動調整が始まると考えられる。次第に、歌を介した母親との関係性は他者との関係性へと広がりを見せ、歌いかけは子どもの自己表現活動及び情動調整の発達を促し、社会情動的活動の基盤作りにも貢献すると考えられる。シンポジウムでは、以上のような歌いかけが果たす重要な役割及び社会的活動へと展開するための支援のあり方について報告する。

「歌いかけ」「読み聞かせ」「読書指導」の実践現場からの報告 佐々木丈夫（日本公文教育研究会）

日本公文教育研究会では「ことばで育む親子のきずなづくり」をテーマにし、「歌いかけ」や「読み聞かせ」を通じて子育てを応援する様々な地域貢献活動を実践している。その一つが2007年から無料で継続している0～3歳児の親子を対象にして「家庭での歌と絵本での働きかけ」を推進する「こそだて ちえぶくろ」活動である。この活動では、2012年9月末現在、12,000名を超える公文式指導者によって実施され、16万組の親子が参加している。またやはり無料で提供している「絵本子育て応援サイト mi:te[ミーテ]」(<http://mi-te.jp>)では、30万人の会員に、読み聞かせに関するサービスを提供している。一方このような推奨活動を継続していくための基礎研究として、2006年からは「子育ての科学共同研究班」を組織し、発達心理学と脳科学から「歌いかけ」と「読み聞かせ」の効果についての共同研究活動をスタートさせ、様々な角度から共同研究を継続してきた。

今回のシンポジウムでは、まず「こそだて ちえぶくろ」活動の追跡調査から示唆された、「歌いかけ・読み聞かせ」活動の家庭での習慣化が、親子のきずなづくりや母親の子育てに関する意識の変容を通して、良好な親子関係の形成と子どもの基盤的な発達に貢献する可能性について報告する。また、ミーテのWEBアンケート調査から得られた2012年現在の日本における家庭での読み聞かせの実践状況とともに、公文教育研究会が独自に実践してきた読書推進活動についても報告させていただきたい。